2012 年度 小委員会活動成果報告

（2013 年　2 月　10 日作成）

小委員会名	集合住宅小委員会	**主 査 名**：福田展淳 **就任年月**：2011 年 4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	環境工学委員会 （環境設計運営委員会）	**委員長名**：砂土原　聡 **主 査 名**：福田展淳
設　置　期　間	2011 年　　4 月　　～　2013 年　3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	本委員会は、集合住宅の熱・光・空気・音環境について、環境工学の立場から、その先端研究の調査を進めるとともに、集合住宅の居住環境を議論し設計に活かすことを目的として設置する。超高層住宅など３大都市圏では集合住宅の建設が著しく、地方都市においても、コンパクトシティ化が進む状況から今後、集合住宅が多く建設される可能性が高い。そこで、これからの集合住宅の住環境研究のあり方や生活者側からの居住環境意向に基づく設計指針について、環境工学分野での関連論文をまとめ、委員会及びブログや掲示板を活用した Facebook 上でも議論を行い、それらの内容を出版という形で積極的に情報公開していくことを目的とする。 HP での活動紹介 ・屋根面での遮熱性能を断熱性能と混同した記述に対する注意喚起 ・日影と超高層	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：　無 主査：福田展淳（北九州市立大学） 幹事：隈 裕子（サイバー大学） 委員：高 偉俊（北九州市立大学）、尾崎明仁（京都府立大学）、中島裕輔（工学院大学）、山本洋史（東京ガス）	
設置 WG （WG 名：目的）		
2012 年度予算	133,000 円	**ホームページ公開の有無**：有 **委員会 HP アドレス**： http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s2/houseWG/framepage.htm

項　　目	自己評価
委員会開催数	3　回（年度内計画を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	
講習会	
催し物 （シンポジウム・セミナー等） ＊能力開発支援事業委員会承認企画	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	

目標の達成度 **（当初の活動計画と得られた成果との関係）**	設計者に対しては、環境工学委員会に属する小委員会として、環境工学の立場から設計者と環境工学の知見を結ぶ立場をとることを明確にし、設計者に、設計時の判断材料となる環境工学の知見を集めることとし、以下の方針で、書籍の項目出しを行い、議論を重ねて、出版の目次案までが、ほぼまとまった。 以下活動の達成度を示す。 1. 設計者等に伝えるべき必要度の高い環境工学分野の知見の検討（95%） 既存論文の収集と学会発表の中から、集合住宅に関する知見を集め、執筆者及び論文の内容を踏まえた項目を収集したが、この中から、再度の項目の絞り込み、内容の検討を行った。 2. 方針、書籍タイトル、目次、執筆分担（95%） 方針としては、 ・集合住宅設計に関する学会の指針では、設計時に必要な内容が網羅的にまとめて提示されている。また、住宅性能表示制度では、環境基準で言えば、その住宅が持つ性能のレベルを表示する制度となっている。このような基準を示す基準書に対し、本出版では、環境工学分野に関わる設計者（一般の購入者）が陥りやすい誤りや勘違いを中心に特に大事なポイント、近年の新しい技術や考え方に対する学者、研究者としての見解などをまとめる。 ・文書の書き方を考慮（設計者と住宅購入者双方に対しての言葉使い、言い回し） ・読み物としての本、分かり易い言葉使い、図表をふんだんに用いる ・Ａ５版または、Ｂ５版 ・書籍のタイトル案 :「集合住宅デザイナーのための環境工学」、「集合住宅設計者のための環境工学」、「環境工学的視点で考える集合住宅設計」、「環境から考える集合住宅設計」、「設計者（一般の）が陥りやすい誤りや勘違い」（サブタイトル）「集合住宅設計者・購入者が知っておくべき環境工学」 「これだけは知っておいてほしい、集合住宅の環境工学」 ・前半を基礎的項目とし、後半を近年の研究発表から取り上げたトピック的内容とする。 3. 公開　非公開 HP 上でのテーマの掲示と内容の検討: （70%） Facebook での本委員会の意見収集用のページを作成した。 実際の公開には、至らなかった。出版内容が固まった時点で親委員会の承認を受け、公開する予定。 ４．本小委員会への意見募集の案内の作成、提出準備（60%）
委員会活動の問題点・課題	1. 網羅的な内容を考え、全体として分野を広げることを試みたが、執筆者などの問題があり、最終的に、熱環境とエネルギー分野に絞って内容をまとめることとした。 ２．主査の期間中の海外赴任や震災の影響で実質的な活動が停止したため、当初の予定が長引いた。

＊　小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

＊　中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学本委員会用　自己評価欄

2012 年度 小委員会活動 自己評価

（最終年度評価）

総合評価 (4 段階評価)	A　(B)　C　D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	本委員会では、一般的の住宅購入者や設計者が本来、知っておくべき環境工学的知見が、あまり認識されないまま、設計が行われ、生活が営まれていることに鑑み、学会で発表されている論文の中で、特に設計者や住み手に伝えるべき事項を抽出し、書籍として刊行することを目的として活動を勧めてきた。書籍に的を絞ったのは、議論の中で、普及を前提にすると、一般の読者、特に集合住宅を購入しようとしている買い手などにも対象を広げているためである。 　総合評価としては、出版の前段階までとなったために当初の目標の７５％程度の達成度とした。 　次年度は、この知見をまとめ、HP での公開、書籍の刊行へ、環境設計運営委員会のもとで、活動を継続する。 ○問題点の整理 ①委員だけでは網羅できない内容に関し、他の研究者へ情報提供を行ってもらうための働きかけを行う。・・・環境工学委員会研究者に対する執筆者の公募を試みたが、実質的な負担をお願いできないのではないかとの意見がある執筆など依頼を断念した。そこで必要と考えられる知見の論文や報告に対し、委員会のメンバーが論文紹介を行う形で執筆を行うこととした。 ②当初、トピック数が少ないことで書籍として成立するかとの議論があり、網羅的にトピックを収集したが、ばらばらの内容になることから、重要と思われることを、絞って紹介する方針とした（2011 年度）。また、委員の持っている知識をできるだけ活用することとした。 　本来は、企画出版委員会に移行すべきであるが、執筆が間に合わず、次年度に持ち越すこととなり、目標達成にいたらなかった。

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画･目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価･外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。